

そしてだれも笑わ

バックウォルド傑作選 2

アート・バックウォルド 永井淳・訳

く
な
つ
た



そしてだれも笑わなくなつた
バックウォルド傑作選2

アート・バックウォルド 永井淳・訳

DOWN THE SEINE AND UP THE POTOMAC
WITH ART BUCHWALD
COPYRIGHT © 1956, 1957, 1958, 1959, 1960, 1961, 1962, 1963,
1964, 1965, 1966, 1967, 1968, 1969, 1970, 1971, 1972, 1973, 1974, 1975, 1976, 1977
BY ART BUCHWALD
JAPANESE TRANSLATION RIGHTS RESERVED BY BUNGEI SHUJUN LTD
BY ARRANGEMENT WITH
ROSLYN TARG LITERARY AGENCY, INC., NEW YORK
THROUGH TUTTLE-MORI AGENCY INC., TOKYO
PRINTED IN JAPAN

そしてだれも笑わなくなった

一九八〇年一月二五日第一刷

一九八一年一月五日第三刷

定価 一五〇〇円

著者 アート・バックウオールド

訳者 永井 淳

発行者 半藤一利

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話 〇三―二六五―一二一

印刷所 共同印刷

製本所 中島製本

万一落丁乱丁があればお取替えします

そしてだれも笑わなくなった
目次

第十部

幼稚園のインフレーション 9

だれが心配するか 11

汝の敵を知れ 14

ボビーと急流下り 17

本当だよ、ヴァージニア 19

ソ連はいかにして

イスラエルを援助したか 22

国際危機ガイド 25

合併の行きつくところ 27

アメリカ第三の産業 29

人間工学者 32

爆弾売ります 34

新鮮な空気は体に毒 37

非アメリカ人度の限界 40

能率的な政府 43

公安審査 46

指導者の分析 48

第十一部

読者への秘密の手紙

—わたしがポルノを書かない理由 51

刑務所入所テスト 55

税金を完納した男 58

体制は手強い 60

負け惜しみ 64

日曜新聞の焼き方 66

性教育—その是非をめぐって 69

クリスマス劇 72

コンピュータもお手上げ 75

核兵器恐怖症の治療法 77

徴兵通知 80

スウィンガーも楽じゃない 83

クレムリン観測者 86

新しいステータス・シンボル 89

商品保証の実態 92

まず注意書を読め 95

主婦お断わり 98

彼らはいかにしてジョンソンに

ニユースを伝えたか 100

空の旅の突破口 104

第十二部

ザ・グレートテスト・コラム 107

ハッピー・ハロウィーン！ 110

災難続きの原因は 113

停電の効用 115

白ねずみたちの楽しみ 118

どっちの味方か 122

母なる自然の遺言 124

手荷物係養成所 127

鉄道救済法 130

アース・デイ 132

南太平洋 134

終りなきアメリカのいたちごっこ 137

イージー・ライダー 140

秘密の霊園 143

銀行国家 145

斧が振りおろされる前に 148

プロ・フットボール殺人事件 151

家族向け映画 154

禁句集 157

あなたが選んだ子供 160

サーヴィス契約 163

穴ぼこ大会 165

大いなるデータ飢饉 168

国旗を買う 171

父親たちはなぜ破産するのか 173

町でいちばん清潔なワイシャツ 176

第十三部

ニクソンと神の対話 181

リチャード三世

(シェークスピアに無断で) 184

ホワイト・ハウスの刑事コロンボ 187

カストロへの一撃 191

終りなきウォーターゲート・

サーガ 194

フューチャー・ショック 197

平和のゼロ配当 200

謎が解けた 202

彼らはスコッティになにをしたか 205

毛沢東のアメリカ訪問 208

リチャード・ニクソンの詩 211

キッシンジャーの腹痛 214

ハーツ・レンタ・ガン 218

人生の真実 その二 220

自己発見 223

チャイルド・スワッピング 226

腰痛の問題 229

クリスマス・カードは

すべてを語る 232

観光客のためのお祈り 234

本を書かない法 237

豚は告白する 240

書評の真実 243

ラスト・フラット・イン・パリ 246

職捜し 249

ヴェトナムからの写真 253

第十四部

ウォーターゲート以前 257

「汝らは信じるや」 260

集団訴訟 263

エネルギー危機の元兇 266

新同衾計画 269

シート・ベルト着用 272

少なく使い、多く払う 275

「罵言削除」 277

ヘンリーはなにを与えたか 280

チェッカーズ訪問 283

キッシンジャーの結婚 286

明快な謎解き 289

第十五部

オイル・マネーのリサイクリング 293

亡命者の母 296

医者の宣伝 299

パリの食事 303

コレクト・コール 306

税金の暗号破り 309

ワシントン・トライアングル 312

議員の休暇 315

ロッキード・キックバック

一一〇〇
318

世界はロバーを愛す 321

ママさんテニス 324

メール・デイ 327

景気後退はいかにして起きたか 330

実質航空料金 333

CIAの副業 336

ワシントンの贈物交換 339

そしてだれも笑わなくなった 342

アドヴァンテージ、ゴッド 344

アメリカほど住みよい国はない 348

そしてだれも笑わなくなった
△バックワールド傑作選2▽

第十部

幼稚園のインフレーション

学年度のはじまりと財政の逼迫が、全国の子を持つ親たちを苦しめている。

わたしが先日友人のブロックと会ったとき、彼は悲鳴をあげていた。

「ロジャールが生まれたとき」と、ブロックはいった。「うちではすぐに彼の教育のために保険に入った。ところが今じゃインフレーションと高い教育費のせいで、その保険金は底をついてしまったのに、ロジャールは卒業までまだ六か月も残している始末なんだ」

「大学というところはそんなに金がかかるのかい？」と、わたしは質問した。

「大学とはどういう意味だ？」と、ブロックが反問した。「ロジャールは幼稚園へ行ってるんだよ」

「ふうん、幼稚園ね」

「年鑑と舞踏会を別にして、年間二千五百ドルはかかる。ロジャールを保育園に入れたのが大きな間違いだったらしい。三歳で保育園に入れて、五歳になるともう本格的な教育のための資金が全然残っていないというありさまだ。もう一度やりなおさなければならぬとしたら、ぼくは子供

を砂箱で遊ばせておくだろうが、なにしろアリスが息子にはりっぱな教育が必要だといつてきかなかったんだよ」

「ロジャーが幼稚園を卒業するまで銀行から金を借りられないのかい？」

「それが実は、もう夏のはじめに千ドル借りてしまったんだよ」

「その金をどうしたんだ？」

「ロジャーをデイ・キャンプへやるのに費ってしまったんだ」

「少なくとも無駄づかいではなかったわけだ」と、わたしは彼を慰めた。「幼稚園をちゃんと卒業したいという子供たちのための政府補助金はないものかね？」

「ぼくもそれを調べてみたよ。補助金の大部分は小学校五年かそれ以上の子供たちの研究を対象とするものばかりだ。ロジャーの通っている幼稚園も、細菌戦争の研究を承知すれば政府から多額の補助金をもらえたのだが、園長があとで公表できないような研究を子供たちにさせるわけにはいかないと突っぱねたのさ」

「奨学金は切れてしまったんだらうね？」

「きみはわかってないんだよ」と、ブロックが答えた。「幼稚園で親を悩ますのは授業料だけじゃない。スクール・バス、絵具、粘土、チョコレート・ミルクといったものにひどく金がかかる。それだけでほかに千五百ドルも必要なんだ」

「ヨットと同じだな。問題は購入資金ではなくて維持費というわけだ」

「そのとおり。ぼくはロジャーを卒業まで幼稚園に通わせるだけの金でイェールを卒業した。ところがそのことを彼に話してやつてもいっこうに動じる気配がない。このごろの子供はどんなこ

「とにも平然としているよ」

「自分で授業料の一部を稼ぐために卒業を延期したらどうかと、ロジャーに話してみたのかい？」
「アリスがそれには反対なんだ。彼女がいうには、幼稚園は子供にとって楽しい時代であるべきだから、父親が適切な教育プランを立てなかったというそれだけの理由で、自分で働いて金を稼ぐことに気をつかわせるべきじゃないんだってさ」

「きみも大変なようだね。しかしロジャーが幼稚園を卒業する日に、きみの苦勞も報われるというもんだ」

「おそらくそうだと思うが、ロジャーは早くも小学校に入りたいようなことをそれとなくいいだしているんだよ」

だれが心配するか

今日の世界で厄介なことの一つは、あまりにも心配事が多すぎることである。あることの心配がやっとなくなったと思う間もなく、別のことを心配しはじめなければならない。

大部分のアメリカ人はあらゆることを心配している暇がないにもかかわらず、科学者、政治家、

將軍、社会福祉家、医師、弁護士、テレビ解説者、新聞論説委員、コラムニストといった人々から、今すぐ心配しはじめなければ大変なことになる、と、ひっきりなしに脅かされている。

わたしの一族はこの問題の解決策を見出したと考えている。この方法はいそいそとやっている、わたしはほかの人々にもそれを教えてやりたい。われわれは二週間ほど前に、一人の人間が一つのことだけ心配して、ほかのことはきれいさっぱり忘れてしまうことに決めた。

例えば、わたしの父親は中東問題だけを心配することに決めた。父が中東問題を心配することになったので、ほかの者はだれ一人としてそのことを心配する必要がなくなり、自分が関心を持っている事柄を心ゆくまで心配できるようになった。

姉のアリスはわれわれのかわりに中国問題を心配してくれる。彼女は毛沢東や紅衛軍に関する記事を読むたびに、われわれに電話をかけてきて、「わたしはとても心配だわ」と報告する。むろんわれわれはいたって気楽である。「中国は彼女の問題だ」と、常々自分にいい聞かせているからだ。

妹のイーディスは人口爆発について心配している。彼女がなぜ人口爆発を選んだかは知る由もないが、ただある日彼女が「ジョニー・カースン・ショー」か「マーヴ・グリフィン・ショー」か「ジョーイ・ピショップ・ショー」で——どれだったかは彼女自身もおぼえていない——二〇〇〇年には一人当たりたった二十平方インチの土地しかなくなってしまうという話を聞いたことだけははっきりしている。今や彼女は何種類もの新聞に一通り目を通し、人口爆発に関する記事が一つも見つからなければその日は心安らかでいられる。

わたしのおじのオスカーがヴェトナム問題を心配してくれることになったのは、われわれにと

ってもつけのさいわいだった。ヴェトナムについて心配するのは時間がかかりすぎてみんないやがったが、オスカーが自分はアメリカの諸都市の暴動よりもヴェトナムの心配をするほうがいいといってくれたのである。

フランス嫌いの妹のドリスはシャルル・ドゴールのことだけを心配している。先日彼女は人口爆発専門の妹のイーディスと喧嘩した。喧嘩の原因はイーディスがドゴールなど心配するほどの人物ではないといったことだった。ところがドリスはひとの心配事によけいな口出しはするなどいい、自分はドゴールのカナダ訪問以来心配でたまらないのだと打明けた。

わたしの妻は喫煙の害を心配することを選んだ。彼女は心配すればするほど煙草をたくさん吸うので、わたしはその心配をやめさせようとした。しかし彼女がわれわれみんなにかわって煙草のことを心配してくれるものだから、一族の者はなんの心配もなく煙草を吸い続けることができる。

わたしの義理の兄弟たちもそれぞれ心配事の一つずつ選んだ。ハロルドは自動車の安全性を、アーサーは大気汚染を心配しているが、イズだけはボストン・レッドソックス以外のことを心配させようとしても頑として首を縦に振らなかった。

わたしがワシントンに住んでいるものだから、一族はわたしにジョンソン大統領についての心配を押しつけようとした。LBJのことを心配するとなるとフル・タイムの仕事になってしまうし、そうなればほかのことを心配する時間もなくなるので、最初わたしはそれを断わった。しかし彼らは、わたしが長いあいだ自分自身のために大統領のことを心配してきたのだから、彼らのために心配するのもいたって簡単だろうと指摘した。

わたしはしぶしぶ承知し、それ以来夜もろくろ眠れないものの、少なくともリチャード・ニクソンのことはもう心配していない。それはモリーお婆の役目だからである。

汝の敵を知れ

「ヴェトナム戦争の問題の一つがなんだか知ってるかね？」と、最近ペンタゴンのある大佐がわたしに質問した。

「さあ、知りませんね」と、わたしは正直に答えた。

「それは敵を敵としてはつきり割りきれないことだよ」

わたしはしばらく考えてからいった。「いったいどういうことですか？」

「今いったとおりさ。アメリカ人の気持ちにぴたっとくるような言葉で敵を表現することが不可能なんだ」

「つまり第二次大戦中に日本人を腰拔けと呼んだようには彼らを呼べないということですか？」
「そのとおり。また、味方のヴェトナム人が敵のヴェトナム人とそっくり同じ顔つきをしているので、人種差別的な呼び方も禁句なのだ」